

## 実践的唯物論のエコロジー的形態

岩佐 茂

はじめに

エコロジー思想のサイドから、しばしば、マルクスの思想は、他の近代思想と同じように、環境破壊を導いた思想として描き出されることがある。<sup>[1]</sup> エコロジストたちが、マルクス主義も環境破壊に責任を負っていると主張するのは、かつての東欧の社会主義や現存する社会主義が環境破壊をひきおこしていることにはたいする反発だけではなく、マルクスの思想そのもののなかに、他の近代思想と同じように、「自然の支配」という人間中心主義があり、それが環境破壊につながっていると感じているからである。だが、はたしてこの指摘は的をえているだろうか。

このような批判にたいしては、これまでも、反論の試みがなされてきた。社会主義が環境破壊をひき起こしてきたという現実があるなかで、エコロジー的視点に立脚したエコ・ソーシャリズムが提起されてきたし、マルクスの思想が環境破壊につながっているという批判にたいしては、マルクスの思想のもつエコロジー的視点が主張さ

れてきた。わたくし自身は、社会主義は本質的にエコ・ソーシャリズムでなければならぬと考えているし、マルクスの思想そのものがエコロジーの視点を内包していると思<sup>(2)</sup>っている。

このようなわたくしの立場を前提にしたうえで、本論では、マルクスの哲学的立場が実践による対象変革を目指す実践的唯物論であると主張される場合の、実践的唯物論の実践性とエコロジーとの関係についても、一歩突っ込んで考究してみたい。

### 一、マルクスの実践的唯物論とは

『ドイツ・イデオロギー』においてマルクスとエンゲルスが「実践的唯物論者」という表現を用いていることもあって、マルクスの哲学的立場が実践的唯物論であるということについては異を唱える論者はほとんどいない。しかし、マルクスの哲学的立場が、どういう意味で実践的唯物論であるのかということにかんしては意見の分れがある<sup>(3)</sup>。

最大の論点は、実践的唯物論と弁証法的唯物論とが相いれるかどうかという点にある。大別すれば、次の三つに類型化されよう。一つは、西欧マルクス主義のように、弁証法的唯物論を否定して実践的唯物論を積極的に主張する立場から、マルクスの哲学的立場は実践的唯物論であり、弁証法的唯物論はエンゲルスやレーニンの立場であるとみなすパターンである。もう一つは、正統マルクス主義のように、従来の弁証法的唯物論を擁護する立場から、マルクスの哲学的立場が実践的唯物論であることは否定しないが、西欧マルクス主義の実践的唯物論を批判し、実践的唯物論を弁証法的唯物論に収斂させてしまうパターンである。第一と第二のパターンはいずれも、

実践的唯物論と弁証法的唯物論とを対立させている。それにたいして、第三のパターンは、マルクスの哲学的立場は、弁証法的な実践的唯物論であるとみなして、実践的唯物論と弁証法的唯物論とを統一的に把握しようとするものである。

だが、このパターンの場合でも、どのような意味で、マルクスの哲学的立場が弁証法的な実践的唯物論であるのかということについては、意見の分れがある。わたくしは、従来おこなわれてきた論争を踏まえて（個々の論争には立ち入らないが）、弁証法的な実践的唯物論を、（一）人間の意識の外部に、それとは独立に客観的實在が存在するという哲学的唯物論に立脚していること、（二）自然弁証法を肯定していること、（三）主体・客体の弁証法に立脚していること、（四）社会変革の思想であること、（五）認識的・価値的態度を媒介にした実践による対象変革であること、（六）疎外論的視点を内包していること、（七）実践のもつ目的意識性を重視していることによって特徴づけたいと考えている。

ここでは、これらの諸点のうち、従来の論争ではあまり論じられることのなかった（五）～（七）について言及しておくことにする。

まず、弁証法的な実践的唯物論が、認識的・価値的態度を媒介にした実践によっておこなわれる対象変革を主張していることにかんして。実践的唯物論は、変革主体が対象に実践的にかかわることを主張するが、そのさい、主体の対象（客体）への実践的にかかわりは、対象にたいする認識的態度だけではなく、価値的態度によっても媒介されていることを重視する。認識と実践の媒介項として対象にたいする価値的關係を位置づけることによって、人間と対象との実践的關係が対象にたいする認識的關係から直接導かれるものではなく、対象にたいする価値評価によって異なった実践的關係としても取り結ばれることを正当に評価することが可能となる。対象にたいする

認識がたとえ同じであるとしても、対象にたいする価値的態度が異なれば、対象にたいする実践は異なったものとなりうるのである。

弁証法的な実践的唯物論が疎外論的視点を内包していることにかんして。これは、従来の実践的唯物論の特徴づけをめぐる議論においてはほとんど留意されてこなかった点である。実践的唯物論が社会変革の思想であるかぎり、疎外された現実と対峙して、その現実を克服しようとするものである。そのためには、目指すべき理念を定立することが必要となるが、疎外論的視点は、この理念を、ア priori に、あるいはユートピアとして提起するものではなく、疎外された現実の否定的形態を徹底的に批判し、そのうちに即自的に含まれている肯定的契機を対自化させることによってつかみ出そうとするものである。若きマルクスは、疎外された労働と疎外された交通という疎外の二つの形態を析出したが、疎外論的視点は、経済学研究を含め、マルクスの生涯をとおして保持されている。

弁証法的な実践的唯物論が実践のもつ目的意識性を重視していることにかんして。マルクスは、『経済学・哲学手稿』で、人間の生産活動が「類的活動」であるとみなしたとき、そのことによって、人間の生産活動が本質的に目的意識的活動であることを主張したのであるし、『資本論』では、人間の労働が蜘蛛や蟻の行動と本質的に違うのは、前者が結果を観念的に先取りする目的意識性にあることのうちに見ていた。

従来、結果を観念的に先取りする目的意識性は労働によってつくり出される生産物を直接念頭において解釈されてきた（この目的意識を「生産物産出の目的意識性」と呼ぶことにしたい）が、それだけに限定される必要はないであろう。むしろ、環境保護との関係でいえば、生産物を産出する労働の過程や結果が人間と自然との関係にどのような影響をあたえるのか、自然をどのように破壊するののかということについても目的意識（この目的意

識を「生産に伴う環境配慮の目的意識性」と呼ぶことにしたい）をもつ必要がある。その点では、自然変革の労働の目的意識性は、「生産物産出の目的意識性」と「生産に伴う環境配慮の目的意識性」という二重の視点から重視される必要がある。

## 二、ポストモダンとしての実践的唯物論

上述のように特徴づけられるマルクスの弁証法的な実践的唯物論は、近代資本主義社会を批判し、それをのり超えようとした社会変革の思想である。その点では、マルクスの思想は、語義通りの意味でポストモダンを目指すもの、あるいはポストモダンの思想とすることができる。だが、この点については、注釈が必要であろう。なぜなら、今日のポストモダンの思想潮流（ポストモダニズム）からは、マルクスの思想も西洋近代思想の枠内にあるものとして批判されているからである。

わたくしが、マルクスの思想は近代資本主義をのり超える思想という意味でポストモダンであるという場合、従来、ポストモダンとポストモダニズムが概念的に曖昧なままに混同されて使用されてきた傾向にたいして、両概念を概念的に区別する必要があるという前提にたっている。語義にしたがえば、ポストモダンは、文字通りポスト近代の意味であるし、ポストモダニズムは、近代思想をのり超えようとするある種の思想潮流を指しているからである<sup>4</sup>。

両概念が混同され、曖昧に使われてきた責任の一端は、一九八〇年代にポストモダンを流行させるきっかけをつくったジェンクスやリオタール自身にある。

ジェンクスは、『ポストモダンとしての建築言語』（一九七七年）<sup>5</sup>において、機能主義や機能美を重視するモダニズム建築にたいして、多元的・多義的意味合いを重んじる建築様式をポストモダンとして言い表した。ポストモダンは、モダニズムとの対概念で使用されている。ポストモダニズムとして規定すべきものを、ジェンクスはポストモダンと表現したのである。

また、リオタールは、『ポストモダンの条件』（一九七九年）において、「高度に発達した先進社会における現在の状況」をポストモダンと呼び、キリスト教の救済の物語、解放の物語（啓蒙主義、マルクス主義も含まれる）といった、近代の「大きな物語」「メタ物語」が崩壊した今日、消費や情報といった、身近な小さな物語に意味を見出そうとする「ポストモダンの状況」が生じていることを指摘した。<sup>6</sup> リオタールが問題にしたのはポストモダンという「条件」であり、「ポストモダンの状況」であった。そのさい、かれが問題にした「ポストモダンの状況」と、かれ自身による「ポストモダンの状況」のとらえ方とは区別して考える必要がある。「ポストモダンの状況」をどのようにとらえるかについては、答えはかならずしもひとつではないはずであるからである。

だが、リオタールその人においては、当然のことながら、「ポストモダンの状況」の問題提出とその答えとは一つのものである。リオタールは自らの考えをポストモダニズムと名づけたわけではないが、リオタールがポストモダニズムの「提唱者」とみなされる場合には、ポストモダニズムはリオタールの問題提起とその答えの両方を包み込んでいわれている。そのために、ポストモダンとポストモダニズムとは概念的に区別されず、しばしば混同されることになった。

リオタールの『ポストモダンの条件』には、情報や消費といった身近な小さな物語に意味を見出そうとする「ポストモダンの状況」が、「大きな物語」「メタ物語」「解放の物語」との対比のなかで論じられているだけであり、

そのような「ポストモダンの状況」を生み出した近代資本主義との連関のなかで考察しようとする視点は希薄であるように思われる。それには、マルクスの思想をポストモダンの思想とみなす場合には、近代資本主義との連関のなかで問われなければならない。そのさい、二つのことが留意される必要があるであろう。

まず第一に、すでに指摘したように、マルクスの実践的唯物論は、近代資本主義社会を根底から批判し、理論的にも実践的にもそれをのり超えようとするものであり、その意味でポストモダンの思想なのである。

そのさいののり超え方の独自性をみておく必要がある。マルクスの思想は近代資本主義を批判し、それをのり超えるための方向づけ・理念を提出したが、その理念をたんなるユートピアとして提出したのではない。マルクスがおこなったことは、疎外された資本主義の否定的現実を徹底的に批判するなかでそのうちに即自的に含まれている肯定的契機を対自化して、理念化するとともに、資本主義の経済的構造を科学的に解明することを通して、資本主義の現実のうちに、その没落の必然性とそれに代わる社会主義の創出の可能性・諸条件を探り出そうとしたことである。

第二に、マルクスが見つめていた産業資本主義と今日の資本主義とは質的に異なった面が生まれており、リオターールの言う「ポストモダンの状況」が生み出されていることに留意する必要がある。しかし、そのような状況のもとでも、マルクスの思想は有効な射程をもっており、その意味で「ポストモダンの状況」の思想なのである。

すでに、一九世紀末から二〇世紀にかけて、西欧の資本主義列強による世界分割が進むなかで、レーニンはその時代の資本主義を近代の産業資本主義との対比で帝国主義として特徴づけたが、マンデルは、後期資本主義をレーニンの言う帝国主義と異なった「画期」をなすものとしてではなく、「帝国主義的独占的資本主義のいつそ

の発展」としてとらえる。それは、半資本主義的な周辺部や後期資本主義の中心部を含め、世界市場において「価値法則が貫徹される」ことによって不等価交換関係として不均等発展がおこなわれるからである。<sup>(7)</sup>

そのさい、マンデルが後期資本主義の特徴として注目するのは、「第三次技術革命」による産業技術の飛躍的発展とそれに支えられた資本主義のあり方であった。「技術の全能さにたいする信仰が絶頂にまで達したイデオロギーこそ、後期資本主義に特有なブルジョア・イデオロギー形態なのである」<sup>(8)</sup>と語られるのも、そのためである。

マンデルは、新たな科学・技術を基盤とした産業が、グローバル化の進捗による不均等発展をひき起こしている現実を見据えていたが、それだけではなく、現代の資本主義が過剰消費や情報化の問題とかわる「ポストモダンの状況」をつくり出していることも見据えていく必要がある。<sup>(9)</sup> リオタールが「ポストモダンの状況」のなかで問うたことは、「大きな物語」から小さな物語へと状況が転換するなかでの人間生活の価値や意味の問い直しであったが、見田宗介は、過剰消費や情報化の今日的様態が資本主義の存続の論理として機能していることを指摘した。<sup>(10)</sup> マルクスの思想に立ち戻れば、両価性を伴う今日における消費や情報化の問題は、消費生活と交通の疎外された形態、生活全般における疎外の問題として問い直される必要があるであろう。

### 三、マルクスの疎外論的視点

若きマルクスが疎外論で問題にしたことは、疎外された労働と疎外された交通という疎外の二つの形態であった。た。

疎外概念は、『経済学・哲学手稿』のなかで、疎外された労働として提起されたものである。「疎外された労働



働」の断片の直後に書き記されたと推測される『経済学ノート（『ミル評註』）では、商品交換においては、人格と人格との関係が疎外され、物象によって支配されざるをえないことが語られ、疎外された交通の問題が考察されている。この問題は、のちに、物象化として具体的に考察されることになる。

物象化とは、実践的な関係態度として取り結ばれる人格相互の関係が物象的な転倒された関係として、資本主義的な生産や交換のもとでひき起こされる疎外の一形態である。疎外は、一般的に、活動のなかで、自己のものであるものが自己から疎遠になり、自立化して自己に対立する事態を指して言われるが、物象化は、活動にもとづく関係のなかで、人格相互の関係が物象相互の関係として現れるという倒錯現象を指しており、特殊な形態の疎外であると言いうるのであろう。

マルクスは、疎外や物象化を克服するために、疎外され物象化された資本主義的現実を批判するとともに、その対極に、疎外されざる、物象化されざる理念（共産主義）を提起した。マルクスにおいては、疎外批判とその克服の論理は、疎外の対極に理念を定立することと表裏一体の関係にある。この理念は現実を批判する価値基準となるものであるが、それは、たんなる主観的なユートピア、超歴史的な不変のイデアあるいは将来社会においてのみ実現される理想にすぎないものではなく、疎外をひき起こす現実そのもののうちから人間活動によって産出されてきた肯定的契機を対自化し、理念化したものにほかならない。

人間活動の疎外され物象化された否定的形態のうちに即目的にある肯定的契機を理念として取り出す努力は、一方では、疎外された現実を価値的に容認できないものとして批判しつつ、他方では、その否定的形態のなかで展開されてきた人間活動の肯定的契機を取り出して、それとして再構成（理念化）する作業でもある。それは、人間活動の否定的形態のうちにある諸契機の連関を解体して、諸契機の新たな連関をつくり出す試みに

ほかならない。そのかぎりでは、それは、資本主義のもとで形成されてきた近代的な知の組み替え作業を伴うものなのである。

#### 四、人間と自然の物質代謝と「自然を疎外する」こと

「疎外された労働」の概念によって指摘されていることは、(一)労働者からの労働生産物の疎外、(二)労働者からの労働の疎外、(三)人間からの類的生活の疎外、(四)人間からの人間の疎外の四点であった。(一)は「生産物の疎外」「物の疎外」であるのにならして、(二)は活動そのものの疎外、それゆえ「自己疎外」とも言われている。マルクスは、この(一)と(二)の疎外のいわば総括として(三)の類的生活の疎外を「導出し」たが、そのさい、マルクスは、「生産物の疎外」「物の疎外」を「自然を疎外する」ことと言いつつ換えている。<sup>11)</sup>

「自然を疎外する」ことについてはそれ以上の直接的な言及はなされていないが、文脈上は、それはしばしば議論の俎上にのぼる「自然は人間の非有機的的身体である」という命題と深くかかわって主張されている。<sup>12)</sup>「自然は人間の非有機的的身体である」ということにかんして、マルクス自身は、「人間が自然によって生きるといふことは、自然は人間の身体であり、人間は死なないためにはたえずそれとかかわらなければならないことを意味する」と述べている。外的自然が「人間の非有機的的身体」と呼ばれるのは、人間が自らの「有機的的身体」を維持するために、外的自然を必要としている(「自然によって生きる」)ことの象徴的表現にほかならない。<sup>13)</sup>

人間は、「自然によって生きる」さい、他の動物とは異なり、意識的な生産活動によって生活手段を産出し、それを消費しつつ生存する。生産活動は、人間と外的自然、「人間の身体的および精神的生活」と「人間の非有機的

身体」との連関の一部である。この連関を、マルクスは、「自然が自己自身と連関している」<sup>14</sup>こととしてとらえるのである。「自然を疎外することとは、人間が生きていくために必要とする人間と自然との連関が壊され、自然が人間にとって疎遠になり、対立することを意味していよう。

「自然によって生きる」ことは、『資本論』では、「人間と自然とのあいだの物質代謝」と言われ、「人間と土地とのあいだの物質代謝」を「攪乱する」ことが問題にされている。<sup>15</sup>人間と土地（自然）とのあいだの物質代謝の攪乱は、「土地の豊穰性」を攪乱し、人間的自然の健康をも破壊することを意味する。これは、内容的には「自然を疎外することと重なり合うであろう。「自然を疎外する」ことが生じれば、人間と自然との連関が壊され、人間と自然とのあいだの物質代謝が正常におこなわれなくなるからである。

生産活動は、人間と自然とのあいだの物質代謝を媒介する過程であるが、それが人間と自然とのあいだの物質代謝を攪乱する場合もある。生産は所与の自然を分解してつくり変えること（自然の変革）であるので、分解の仕方、つくり変えの仕方如何では、人間と自然とのあいだの物質代謝が攪乱されることになるからである。生産における目的意識性が、〈生産物産出の目的意識性〉だけに注がれて、〈生産に伴う環境配慮の目的意識性〉（環境の視点）が無視されるならば、環境が破壊され、人間と自然との物質代謝が攪乱されることになる。生産の規模が大規模になればなるほど、この問題は深刻になるであろう。

それゆえ、今日、環境破壊が深刻化するなかで、生産において、素材や技術、エネルギー、排出された廃棄物の問題にかんして、〈生産物産出の目的意識性〉と〈生産に伴う環境配慮の目的意識性〉（環境の視点）という二重の視点を貫くことが求められている。環境が破壊され、人間と自然とのあいだの物質代謝が攪乱されるのは、利用された素材や技術、エネルギー、あるいは排出された廃棄物が人間と自然とのあいだにどのような影響を及

ぼしているのかがとらえきれていないという人間の認識の有限性による場合もあるが、多くの場合は、環境配慮よりも、利潤を最大化しようとする資本の論理に則った効率的な生産が追求され、環境の視点が無視されるためである。

## 五、生産や消費の活動における知の組み替え

上述の二重の視点が重視される場合には、環境破壊に直結するような生産や消費のあり方の見直しが求められる。生産や消費のあり方の見直しは、生産や消費にかかわる実践の変更を意味するが、そのためには、環境を保護するための知の組み換えを不可避とするであろう。知の組み換えは、純粹に知識の面からだけおこなわれるのではなく、環境を保護するためにはどのような生産や消費が望ましいのかという環境の視点から、価値観の変換と絡み合っておこなわれる。

### (一) 生産における知の組み換え

まず、生産にかんして具体的にみてみたい。素材にかんしていうと、たとえば、従来発砲スチロールが使われていた包装材料を、環境の視点から古紙に切り替えるのも、知の組み替えであるだろう。あるいは、加工食品における保存料などの添加物（人工化学物質）も、それが身体にどのような影響を与えることになるかも検討されなままに（場合によっては、発ガン誘発物質であるということがわかっていても）、法的規制がないかぎり、商品としての寿命を延ばすために用いられているが、健康の視点から無添加の加工食品をどのようにつくっていくの

かということも知の組み替えである。

また技術にかんじていえば、たとえば、農業生産物の増産のために、健康にたいする影響が議論されている渦中にあっても、バイオテクノロジーを用いて遺伝子操作された穀物が生産されている。自動車生産においては、スピードのする性能の良い車づくりが志向されてきたが、排ガスや環境にかんじては、後回しにされてきた。あるいは、企業が利潤をあげるために、日本では、テレビ、冷蔵庫などの家電製品は、耐用年数が八年をメドに生産されている、等々。これらの技術のあり様を環境の視点から見直す必要がある。たとえば、リサイクルすることを前提にした車づくりは、たんに丈夫で壊れにくい車をつくるということだけではなく、リサイクルするためには、知的に分解し易い車づくりが求められることになる。これは、生産技術のコンセプトを転換させることであり、知の組み替えと云いうるであろう。

エネルギーにかんしても、事情は同じである。従来はコストや利便性の面から、化石燃料や原子力のエネルギーに頼ってきた。これらのエネルギーを環境の視点から自然エネルギーに転換させていくためには、大規模・大量輸送型の従来のエネルギー利用のあり方を必要などころで必要なだけエネルギーを確保する小規模・分散型エネルギーに切り替えるという考え方の転換が必要になる。これも、知の組み替えであるだろう。

さらに、廃棄物にかんじていうと、廃棄物問題は環境問題であるという認識から廃棄物を資源として再利用する循環型社会が提起されてきたが、大量生産をそのままにして大量廃棄を大量リサイクルに置き換えただけでは、環境保護にはつながらない。持続可能な社会としての循環型社会を形成していくためには、大量生産という生産のあり方にもメスを入れる必要がある。これも価値観の転換とともに、知の組み替えを必要とする。

これらは、環境や健康の視点を媒介にした知の組み換えである。このような例は枚挙にいとまがないであろう。

素材、技術、エネルギー、廃棄物の面における資本主義的生産の歪みを環境や健康の視点による知の組み替えによって直していく必要がある。人間と自然とのあいだの正常な物質代謝という価値基準からこのような疎外された生産のあり方を批判し、環境や健康の視点を生産過程に組み込んで、生産のシステムをつくり変えていく作業は、理論的には、従来の生産にたいする知の組み替え作業を不可避とするのである。

## (二) 消費における知の組み換え

ところで、マルクスがおこなった資本主義的商品生産の批判は、当然のことながら、生産のあり方によって規定される消費のあり方にたいする批判をも内包するものである。消費のあり方は、消費を規定する生産との連関のなかで問われる必要がある。生産と消費との有機的な連関を、マルクスは、「消費と生産との同一性」と呼んだ。「生産は、(一)消費に材料をもたらし、(二)消費の様式を規定することによって、(三)まず消費によって対象として措定された生産物を、消費者における欲望として産出することによって、消費を生産する。それゆえ、生産は、消費の対象、消費の様式、消費の衝動を生産する。同じように、消費は、目的を規定する欲望として生産者に訴えることによって、生産者の構想 (Anlage) を生産する」<sup>16)</sup>。

生産が、生存のための基本的ニーズの充足を中心とした消費を目的におこなわれている以上、生産は、消費の「材料」「対象」を生産するものであることは疑いない。また、生産が消費のあり方(「様式」)を「規定する」というのはマルクスの基本的な観点であるが、ここで注目したいのは、マルクスが、生産が「消費者における欲望」「消費の衝動」を生み出すと指摘していることである。欲望は充足されることによって新たな欲望を生み出すが、生産者の側も利便性や快適性、ファッション性などの価値を最大限宣伝することによって、「消費者における欲望」

「消費の衝動」を喚起する。そのために、市場調査をおこなない、コマースシャルに莫大な費用を投資することにもなる。その結果、消費が過度に刺激され、人間の基本的要求を充たす消費生活をはるかに超えて、肥大化され、一面化された欲望を追いつづける「消費のための消費」「消費へのあくなき誘い」といった過剰消費が生み出されることになる。

過剰消費は、大量生産・大量消費・大量廃棄によってもたらされるが、大量生産の様式は、資本の論理が効率よく利潤をあげる生産の仕組みでもある。しかし、過剰消費社会の到来のなかで、廃棄物問題が深刻化し、一九八〇年代後半から、廃棄物問題は環境問題であるということが先進国を中心に自覚されるようになってきた。むしろ、より正確には、環境汚染は戦争や有害物質の漏洩によるものをのぞけば、何らかの廃棄物によってひき起こされるのであり、環境問題は廃棄物問題を解決することなしには解決されえないのである。

このようななかで、過剰消費生活のあり方の見直しも始まり、そのためには、減量 (reduce)、再使用 (reuse)、再生利用 (recycle) の3Rの思想や、循環 (リサイクル) 型社会ということが重視されるようになってきた。これらの取り組みは、理論的には、消費生活や廃棄物にたいするわれわれの知の組み替え作業でもある。そのさい、消費・廃棄は生産に規定され、それと有機的に関連している以上、生産・消費・廃棄の全体を視野に入れた知の組み替え作業が必要となる。

生産や消費における知の組み替え作業は、すでに述べたように、何を大切なものとして尊重するのかという価値的態度によって媒介されている。資本の論理によって主導される資本主義的商品生産においては、利潤を最大化しようとする価値的態度 (資本の論理) によって生産のあり方が疎外され、そのもとで、人間と自然との正常な物質代謝が破壊されてきた。それにたいして、人間の健康や環境保全を重視する価値的態度 (生活の論理) か

らは、疎外された生産のあり方を批判して、環境の視点を生産や消費の過程に組み込んでいくことが重視されることになる。

## 六、近代における「自然の支配」の観念

人間と自然の正常な物質代謝とは、自然の一部、生態系の一員である人間が、人間と自然とのあいだの物質代謝を攪乱せずに、自らの生命を維持できる状態のことを意味している。それは、別の言い方をすれば、人間と自然との調和・共生ということにほかならない。人間と自然との調和・共生という考え方は、若きマルクスの自然主義と人間主義との統一の思想のなかにもみとることができる。

人間と自然との調和・共生という考えは、自然環境が破壊され、人間と自然との物質代謝が攪乱されている今日、あらためて見直されなければならない重要な視点であるが、この考えに対立するのが、人間による「自然の支配」という観念である。<sup>17)</sup>この観念は、近代の自然科学や技術の発展とそれにもとづく生産活動による自然の変革のなかでつくり出されたものである。西洋近代の思想家たちも、おおむね人間による「自然の支配」の観念について肯定的な評価をしている。近代における科学・技術のなかで「自然の支配」という観念がつくり出されてきたのが事実であるとしても、しかし、「自然の支配」という観念をもつことと、実際に人間が自然を支配できるということとは同義ではない。

人間は、自然を科学的に認識することによって自然を変革してきたが、科学・技術がどれほど発展しても、自然が無限であるかぎり、歴史的に制約された自然認識はつねに有限であらざるをえない。とりわけ、自然そのも



の法則の認識にもとづいて自然に実践的に働きかける結果ひき起こされることについて完全に予測することは無理である。エンゲルスもそのことを指摘して、自然にたいして人間は「勝利」してきたとしても、「二次的、三次的には」、その「勝利」をも「廃棄し」てしまうほどの「まったく意図しなかつた別の作用」をひき起こすことによって、「自然はわれわれに復讐する」と、述べている。<sup>18)</sup>

しかし、エンゲルスは、同時に、「自然の復讐」を招くような事態がひき起こされるのは、自然認識が不十分で、「二次的、三次的に」ひき起こされる「作用」、あるいは「遠い将来の自然的結果」を予測できなかったためであり、自然法則を認識し、その法則を「正しく適用しうる」ことによって、自然を「支配」し、「自然の意識的な、真の主人になる」とも言明している。<sup>19)</sup> もちろん、自然の「支配」について、エンゲルスは、「ある征服者がよその民族を支配したり、なにか自然の外にあって自然を支配するように、自然を支配するのではなく」、「肉と血と脳が自然に属し、自然のなかにいる」人間が、「自然の法則を認識し、それらの法則を正しく適用しうる」ことによつて、「自然を支配する」のであるとも断っている。このような自然の「支配」は、自然の「制御」とも言われている。<sup>20)</sup>

エンゲルスは、近代自然科学の発展を背景にして、人間が自然法則を「正しく適用しうる」ならば、自然を「支配」「制御」できるときわめて楽観的に語っている。たしかに、開墾によって田畑をつくり、灌漑用水によって田畑を潤すことは、人間による自然の制御の一例である。しかし、この場合でも、人間による自然の制御は部分的、一時的なものにとどまらざるをえない。メソポタミア文明が滅びた要因の一つが灌漑によってひき起こされた塩害の深刻化によるものであったことを想起すべきである。

自然の相互作用が複雑で、無限であり、人間の自然認識がつねに歴史的に制約されて有限である以上、とりわけ大規模開発の場合、「二次的、三次的に」どのような「作用」がひき起こされるについて完全に予測することは

できない。人間が自然を完全に「支配」「制御」することは、そもそも不可能なのである。「自然の支配」という観念は、人間が部分的、一時的に自然を制御してきたことを敷衍して、自然を完全に支配できるということまで膨らませた観念にほかならない。

## 七、人間と自然との関係の制御を目指す実践的唯物論

人間と自然との正常な関係は、人間による自然の「支配」という観念によってではなく、人間と自然との関係を制御することによって維持されてきた。

一般に、関係を制御するということは、関係の両項または関係の一方の項の制御をとおして関係そのものを制御することを意味する。人間と自然との関係の場合には、すでに指摘したように、人間は、自然を部分的、一時的にしか制御することができない以上、人間と自然との関係の制御は、主として人間自身を制御することによって遂行されなければならない。

実際に、生産力が低かった近代以前においては、巨大な力をもつものとして立ち現れていた自然にたいして、人間は必死に闘い、自然を制御しようとしながら、いかにして自然との正常な物質代謝を維持するかということに腐心してきた。そのために、人間は、自然に順応させる方向で自らを制御することによって、自然との正常な関係を維持し、自然との関係を制御しようとしてきたのである。

近代になって、科学・技術と産業の発展のなかで人間が自然を破壊するほどの巨大な力を獲得することによって、人間と自然との関係は大きく変貌する。人間が自らの力を制御しなければ、人間の手によって自然破壊がな

され、自然との正常な物質代謝も維持することができなくなってきたからである。人間と自然との関係を制御するためには、人間の力とそれにもとづく活動を制御することこそがきわめて重要になってきているのである。今日、人間と自然との共生が強調され、「環境管理」の概念が重視されるのも、人間の活動を制御することの必要性からである。<sup>21)</sup> 地球温暖化問題で問われていることは、地球的規模で温室効果ガスの排出を削減するために、人間の経済活動を共同して制御することができるかどうかという問題である。

このような人間と自然との関係の制御を重視したのはマルクスであった。彼は、『資本論』で、「この（労働の——筆者）過程において、人間は自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御する」と述べ、労働を、人間と自然との物質代謝を媒介し、規制し、制御するものとしてとらえるとともに、「この物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同的制御のもとにおく」必要を指摘した。<sup>22)</sup>

自然にたいする労働を「自然の支配」としてではなく、人間と自然との関係の制御として把握したことは、重要である。「自然の支配」という観念にもとづいて労働し、生産することと、人間と自然との関係の制御という視点から労働し、生産することとは、労働や生産のあり方が異なってくる。前者の場合は、生産物をつくるという当初の目的を首尾よく達成するために自然を変革すること、つまり「生産物産出の目的意識性」に主眼がおかれるが、後者の場合は、生産物をつくる場合にも、そのことが人間と自然との関係にどのような影響を与えるのかということをも十分考慮し、人間の力を制御しながら自然を変革すること、つまり「生産に伴う環境配慮の目的意識性」も重視されるからである。この場合には、当初の目的に従って生産物をつくることだけでなく、生産物が使用され、廃棄された場合に、人間と自然との正常な関係にどのような影響を与えるのかということまでも考慮しながら、生産をおこなうことになる。問われているのは、労働や生産のあり方であり、自然変革のあり方

なのである。

それゆえ、自然変革においても、二通りの場合がある。一つは、「自然の支配」という観念にもとづいて自然変革をおこなう場合である。もう一つは、人間と自然との関係の制御という視点を踏まえて、自然変革をおこなう場合である。この場合には、人間の力とそれにもとづく活動を共同的に制御することがとりわけ重要になる。

マルクスの実践的唯物論は実践を強調し、対象変革を強調するが、自然変革においては、人間と自然との関係の制御という視点にもとづいた実践の見地に立つものである。その点では、実践的唯物論はエコロジーの思想と矛盾するものではなく、むしろ、環境保護のためには何をなすべきなのかを考慮した実践をも包み込んでおり、エコロジーの思想と基本的に一致する。

(1) J.Pasmore, *Man's Responsibility for Nature*, 1974, P.24. パスモア『自然に対する人間の責任』岩波書店、一九七九年、三八頁。

(2) 拙著『環境の思想——エコロジーとマルクス主義の接点』創風社、一九九四年、参照。

(3) 実践的唯物論にかんする論争は、旧東ドイツで一九六〇年代終わりにおこなわれ、その紹介(芝田進午編『実践的唯物論論争』青木書店、一九六九年)や芝田進午の問題提起(『実践的唯物論の根本問題』青木書店、一九七八年)を契機に、日本でも、一九七〇年代に論争された。中国でも、一九八〇年代後半に実践的唯物論の論争がおこなわれている。

(4) ポストモダンとポストモダニズムを区別すべきということはこれまでも指摘されてきた。たとえば、M・フェザー・ストン『消費文化とポストモダニズム』は、「ポストモダンとその『派生語』であるポストモダニズムがしばしば混

- 乱して使われたり、相互に交換されて用いられている」(川崎賢一・小川葉子編訳、池田緑訳、恒星社厚生閣、一九九九年、三五頁)ことを指摘している。なお、ポストモダンとポストモダニズムが概念的に混同されていることにたいして、前者を広義のポストモダン、後者を狭義のポストモダンとして区別立てすることも可能であろう。
- (5) 原タイトルは、『The Language of Post-Modern Architecture』であるが、邦訳は『ポストモダニズムの建築言語』(竹山実訳、エー・アンド・ユー社、一九七八年)となっている。
- (6) J・F・リオタール『ポストモダンの条件』小林康夫訳、書肆風の薔薇、一九八六年、七〇八頁。
- (7) Vgl. E. Mandel, Spätkapitalismus, Suhrkamp Vlg., 1972, S. 8, S. 463, S. 496. E・マンデル『後期資本主義』、飯田裕康・山本啓訳、柘植書房、第Ⅰ分冊(一九八〇年)七頁、第Ⅲ分冊(一九八一年)一五一、一八一頁参照。
- (8) Ibid., S. 445. 同上、第Ⅲ分冊、一一五〜六頁。
- (9) ダニユエル・ベルの「脱工業化」、ハーバーマスの「未完の近代」、トフラー「第三の波」、ギデンズの「再帰的近代化」の概念なども、「ポストモダンの状況」にかかわっている。
- (10) 見田宗介『現代社会の理論』岩波新書、一九九六年、三一頁。
- (11) K. Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte. in: K. Marx/F. Engels, Gesamtausgabe (MEGA<sup>2</sup>), Abt. I, Bd. 2, S. 240.
- (12) 「自然は人間の非有機的的身体である」ことにかんする論争については、嶋崎隆『エコマルクス主義』(知泉書館、二〇〇七年)が、その第二部「自然は人間の非有機的的身体である」をめぐる論争で詳しい紹介をおこなっている。
- (13) K. Marx, Ibid.
- (14) Ibid.

- (15) K. Marx, Das Kapital. in: MEGA<sup>2</sup> Abt. II, Bd. 6, S. 476.
- (16) K. Marx, Ökonomische Manuskripte 1957/58. in: MEGA<sup>2</sup> Abt. II, Bd. I-1, S. 29.
- (17) 「自然の支配」という観念がマルクスの思想のうち存在するかどうかにかんしては論争があるが、それについては、韓立新『エコロジーとマルクス』時潮社、二〇〇一年、参照。
- (18) F. Engels, Anteil der Arbeit an der Menschwerdung des Affen. in: MEGA<sup>2</sup> Abt. I, Bd. 26, S. 550.
- (19) F. Engels, Anti-Dühring. in: MEGA<sup>2</sup> Abt. I, Bd. 27, S. 446.
- (20) F. Engels, Anteil der Arbeit an der Menschwerdung des Affen. in: MEGA<sup>2</sup> Abt. I, Bd. 26, S. 551.
- (21) 人間と自然の共生については、尾関周二『現代コミュニケーションと共生・共同』青木書店、一九九五年、参照。また、「環境管理」については、国連環境計画（UNEP）の事務局長のM・K・トルバが「単に環境を管理することではなく、…環境に影響を与えるすべての人間活動を管理することなのである」（『破壊なき開発——変容する環境概念』ハイライフ出版、一九八三年、一八頁）と指摘しているのは大切な視点である。
- (22) K. Marx, Das Kapital. in: MEGA<sup>2</sup> Abt. II, Bd. 6, S. 192, Bd. 15, S. 795.

（一橋大学大学院社会学研究科教授）